

# 「さんぽセル」から「さんぽセル」がでるまで

——「悟空のきもちTHE LABO」さんぽセルがでるまで

## さんぽセルとは

「さんぽセル」は、ランドセルを軽くするために小学生が中心になって開発した、「小学生による小学生のための製品」である。栃木県日光市の小学3〜6年生の兄弟が中心となって開発し、特許も申請した。

車輪のついた2本のステイックをランドセルに取り付けることで、旅行で使うキャリーバッグのように、ランドセルを手で引いて運べるようになる。

「さんぽセル」自体の重さは280g、ステイック部分は収縮自在で、歩道橋や階段は、通常のランドセルとして背負える仕様にこだわった。それによってランドセルの重さの体

感9割削減に成功した。その重さに悩まされてきた子どもたちが、自分たちの力で問題を解決することとなった。

発売前からネットニュースなどで取り上げられ、2022年4月に発売されると、テレビなどのメディアでも大きく取り扱われ、話題となった。クラウドファンディング分を含め累計約7000台の注文が入り、最大4カ月待ちにもなった。その後、6月には文部科学大臣の定例記者会見で「さんぽセル」への称賛のコメントをいただいた。

このように、子どもたちが知恵をふり絞った作戦は大成を収めたものの、開発までの道のりは、すべてが順調だったというわけではない。

専修大学2年

根本誠也

ねもと せいや



## さんぽセル誕生のきっかけ

さんぽセルを開発した「悟空のきもち THE LABO」は、子どもの夢の実現を後押しする会社である。

これまでに発表した商品には、即日完売したメロンパン製のマスク「マスクパン」や、園芸用品として開発されたものの美容品として使われ人気となった化粧水「ひとか」などがある。これらは全国から集まった夢ある学生たちが開発したものである。

開発のきっかけはどれも、日常会話の延長線にあるささいなひらめきであった。

「さんぽセル」の誕生も、きっかけはTHE LABOの大学生と小学生との雑談であった。

さんぼセル誕生の舞台は、学童保育を行うスポーツクラブ「SMYLH」が栃木県日光市で遊び場として開放している廃校である。日光市周辺の小中学生が、様々な遊びやアクティビティーを通して学びを身に付ける場所だ。

外で遊ぶのが大好きな子どもたちだが、雨の日の遊び場所がなく困っていた。彼らの願いは、「雨の日でもゲームが自由にできる部屋」ができることだ。そこで、話を聞いたTHE LABOの大学生が、「みんなでゲーム部屋を作ろう!」と提案したことが、「さんぼセル」開発の始まりとなった。

ゲーム部屋を作るための資金を集めるにはアイデアが必要である。そこで最近困っていることがないか子どもたちに尋ねると、小学生が口をそろえて言った、「毎日学校に背負



さんぼセル

つていくランドセルが重すぎる」という悩みであった。

「ランドセルが重すぎる」。これは彼らだけの問題ではない。

水泳用品メーカー「フットマーク」が2021年、小学1〜3年生1200人に行った調査によると、小学生の90・5%が「ランドセルが重い」と感じていると回答している。その影響は深刻で、慢性的に重いランドセルを背負うと、姿勢の悪化に加え、腰痛、さらには背骨の変形や発育の障害といった悪影響が起ころうといわれている。

これは近年「ランドセル症候群」と呼ばれ



さんぼセルを開発した子どもたち

ている問題である。

教科書のページ数は15年間で1・7倍以上増えているという報告がある。それに加えて、タブレットやノートパソコンという新たな荷物も増えている。別の調査によると、1週間のうち、最もランドセルが重い日の平均は約6kgだという。これは体重60kgの大人に換算すると、立っているのもつらい2ℓのペットボトル9本分(18kg)に相当する。米国小児科学会の取り決めによると、子どもが背負う荷物の重さは体重の10〜20%までである。ランドセルの重さは、この基準値を大幅に超えている。

### さんぼセルができるまで

そんな悩みを解決するために、「ランドセルにタイヤをつけて引っ張ったらいいのではないか」とアイデアを出したのが、当時小学4年生だった双子の兄弟だった。すぐに廃校にあるものを使って試作品を作った。商品化へ向け、THE LABOの3人の大学生が参画し、試作品を作った後は、大学生が持ち帰って改良した。後日再び廃校に持っていく、小学生に見せて実用性を検証してフィードバックをもらう。それを何度も繰り返し続けた。「重たい」「タイヤが壊れる」「ダサイ」といった小学生のダメ出しを、一つ一つ解決していった。ただ、小学生たちのランドセルの扱いは想定外のものも多く、耐久性や安全面を

補強するため、自動車の安全部品などを作るアオキシントック(栃木県)に協力を依頼した。

また、あらゆる通学路を想定し、手分けして踏切や歩道橋、公園、砂利道など約500kmの道のりを歩行してテストを行った。「階段でガンガンする」など、子どもがやりそうな動きもあえて試した。結果として歩行テスト中、警察に職務質問されてしまうこともあった。

困難を乗り越えてやっと完成したさんぼセルだが、発表から間もなく新たな壁が立ちふさがった。

さんぼセル発売のネットニュースに、「子どもが楽をするな!甘えだ!」など、この商品をよく思わない大人たちから大量の批判が殺到したのだ。当初そのことを小学生たちには隠しておく予定であったが、子どもたちはすぐに自分たちでそうした批判的な書き込みをキャッチした。悔しさを感じた子どもたちは、大学生と一緒に書き込みに「反論すること」に決めた。

大人 「これを開発した人、子どものことをよくわかってないですね。」

小学生 「いま小学5年生です。作ったときは4年生です。子どものこと、よくわかってなかったら、ごめんなさい。」

このように困難はあったが、販売を開始すると大人気で、たくさんの人から応援のメッセージもいただいた。

夢のゲーム部屋も、2022年8月に完成した。今では勉強や遊びで疲れた子どもたちのオアシスになっている。

こうして子どもたちのひと夏の挑戦は、成功裏に幕を閉じた。

### 子どもたちの発想が事業になる

さんぼセルへの反響は大きく、従来の「子どもは重いランドセルを背負って体を鍛えなければならぬ」という価値観を変えることに成功した。

これは、「子どもでも自ら考え行動を起せば、社会を変えることができる」という最初の事例になった。

「ランドセルを背負わない選択」。これはまだ小さな一歩かもしれないが、実際に子どもたちの心と体を救い、日本中に勇気を与えた。自分たちががんばれば実際に社会が動くことを小学生が見せてくれている。

これは、いずれ日本、ひいては世界を変えることになる躍進の第一歩だと信じている。彼らの行動に刺激をもらったのは子どもたちだけではない。大人たちにも「諦めず挑戦すること」そして「夢は必ず実現すること」を思い出させてくれたのではないだろうか。

THE LABOの子どもの例が呼び水になって、日本中がそんな雰囲気になり、社会がもっと活性化され、今までにない素晴らしいビジネスがどんどん生まれる

と思う。

そんな未来が来れば、とても素敵だ。

### 今後の取り組み

8月にさんぼセルの続編となる「先生に置き勉を許可してもらおう」ためのグッズ「さんぼロック」を発表した。コンセプトは「机の引き出しをロッカーにしちゃおう」。

学校の机の引き出しに鍵をかけて自身が盗まれないようにするための商品である。

さんぼセルと同じく、日光市SMYLHの子どもたちの協力のもと完成した。

第3弾の置き勉対策グッズも10月1日に発表予定である。

### 【THE LABOについて】

「悟空のきもち THE LABO」は、悟空のきもちの店舗以外の事業を託された子どもだけの研究育成集団として2020年10月設立。準備期間を経て2021年1月より本格稼働。

「子どもがすごい」を体現する8〜21歳までの子どもたちが参加し、お菓子を食べながら日々企画や研究をしている。子どもたちだけで現在2期連続の増収増益。東京・神奈川・沖縄・栃木など全国各地の拠点で活動中。ウェブサイトを <https://the-labo.com/>